# 国立文教施設

# 老朽不足事例集

国 立 大 学 協 会

# はしがき

国立の文教施設は，施設最低基準を戦前の7割程度にさげて，なお，60万坪が不足し，さらに，40年以上経過した老朽建物だけでも，30万坪あるという現状である。

科学技術振興のための理工系学生増募のために，別に，30万坪の増設を必要とするが，この現状においては，現有施設の整備もまた緊急を要し，一日も放置できない。

ここに紹介する老朽不足の事例は，現状の一小部分をしめすにすぎないが，国立文教施設整備費予算増額の緊急性について，強く訴えるものがある。

この問題に対する関係各位の理解と関心が，これによって，いっそう深められるならば幸いである。

昭和36年10月

国立大学協会

# 目　　次

はしがき…… 1

1. 〝危険物と同居で事故〟
北海道大学理学部物理学科…… 7

2. 〝老朽度テスト中〟　北海道大学教養部…… 7

3. 〝倒壊寸前〟　北海道大学体育館…… 8

4. 〝不足施設の窮状を嘆く〟
北海道学芸大学岩見沢分校…… 8

5. 〝家鳴りする分室の老朽校舎〟
北海道学芸大学旭川分校…… 9

6. 〝これでも大学病院か〟
弘前大学医学部附属病院…… 9

7. 〝ボロ建物で教官室もない農芸化学〟
岩手大学農学部……10

8. 〝地震がきたらさあ大変〟
東北大学抗酸菌病研究所……10

9. 〝すしづめ研究室にあえぐ〟
東北大学電気通信研究所……11

10. 〝老朽で狭苦しい〟　東北大学医学部附属病院……11

11. 〝ゆるみ・振動・騒音の学舎〟
山形大学教育学部体育・美術・音楽科教室……12

12. 〝とびとびの仮住まい〟
宇都宮大学農学部林学科……12

13. 〝よくぞ住んでいる〟　宇都宮大学奚川寮……13

14. 〝唯一の園芸学部ではあるけれど〟
千葉大学園芸学部……13

15. 〝狭くて身うごきできない〟
東京大学地震研究所……14

16. 〝命脈つきた奏楽室〟　東京芸術大学音楽学部……14

17. 〝台風18号と寄宿舎〟
東京教育大学国府台分校……15

18. 〝梅雨期，家ダニのでる校舎〟
東京教育大学附属駒場高等学校……15

19. 〝参観者ビックリ〟
東京教育大学雑司ヶ谷分校盲学校寄宿舎……16

20. 〝すぐにもこわれる〟　東京工業大学寄宿舎……16

21. 〝この現況〟
お茶の水女子大学文教育学部附属中学校……17

22. 〝旧兵器庫までも研究室に〟
横浜国立大学工学部電気工学科……17

23. 〝大学の老廃施設〟
新潟大学医学部附属病院・新潟大学教育学部……18

24. 〝寺の庫(くり)裡とまちがう〟
金沢大学女子寮……18

25. ≪明治がここにある≫
金沢大学医学部附属病院……19

26. ≪エンジニヤーの卵も難産≫　金沢大学工学部……19

27. ≪信州名物は「そば」だけでない≫
信州大学繊維学部紡織工学科……20

28. ≪老朽校舎をなくそう≫　静岡大学工学部……20

29. ≪風におののき、地震におびえる≫
名古屋大学教育学部付属高等学校……21

30. ≪一学科に三学科≫　京都大学工学部……21

31. ≪毎日はらはら，もうこれ以上はあぶない≫
京都学芸大学学芸学部付属桃山中学校……22

32. ≪今様うぐいす張りの学生寄宿舎≫
奈良女子大学……22

33. ≪映画化された校舎≫　岡山大学理学部……23

34. ≪真ん中に柱の建つている教室≫
岡山大学教育学部付属小学校……23

35. ≪真壁造りの研究所≫
岡山大学農業生物研究所……24

36. ≪間借り住まいの≫
広島大学教育学部附属三原中学校……24

37. ≪すし詰め実験室≫　広島大学理学部化学科……25

38. ≪乱立した若朽建物≫　徳島大学工学部……25

39. ≪床板に足を踏みこむ≫
福岡学芸大学学芸学部付属福岡中学校……26

40. ≪強風にあぶない≫
福岡学芸大学学芸学部付属久留米小学校……26

41. ≪老朽動脈硬化症≫　九州大学医学部附属病院……27

42. ≪馬小屋にも劣る≫
九州大学工学部高速流実験室……27

43. ≪「ほう！　これはひどい。これに
学生が住んでいるのですか！」≫
九州大学寄宿舎……28

44. ≪台風時には休講も≫　佐賀大学教育学部……28

45. ≪手術中，医師の頭に雨がふる≫
熊本大学医学部附属病院……29

46. ≪火事の危険……心配な実験室≫
大分大学学芸学部自然科学実験室……29

47. ≪あぶない，せまい≫　宮崎大学附属図書館……30

48. ≪台風銀座のまんなかにある≫
鹿児島大学水産学部……30

# 国立文教施設

# 老朽不足事例集

## 1. 〝危険物と同居で事故〟

北海道大学理学部物理学科

物理学科の面積は昭和5年の創立当時そのままだ。基準の1,050坪に429坪も不足だ，学生数の急増で，研究室にも学生を収容している。実験設備の中には危険なものが多くある。危険物は別室に設備すればよいのだが，せまいために雑居，いま思い出しても，ぞっとする事故があった。学生が5万ボルトの高圧線に触れて卒倒した。幸いに適切な処置でことなきを得た。まだある。水素ボンベも別室設置をたてまえとしているが，場所がなくて研究室に同居。実験操作中ボンベの口金から火が吹き出して教官2人がやけどした。この事故は，土曜日の午後で，学生は危害を免かれた。物理実験には，この種の事故の発生がまま予想される。教官学生とも〝もっと広い場所があったら……〟の合言葉に，一身を危険にさらし特攻精神をふるい立たせて研究している。

## 2. 〝老朽度テスト中〟

北海道大学教養部

わしは北大教養部建物である。わしの生れは，かの有名な寮歌〝札幌農学校は，蝦夷ケ島，熊が棲む。荒野に建てたる大校舎……〟に知られるように，明治末年に遡る。現有家族は3,172坪で，その大半は同じ生れだ。木造で50年の老齢ともなると，大分くたびれ果て，杖にすがって立っているのがやっとだ。そんな有様だから足腰にまったく自信なく，今までにも，床を踏み抜いたり，壁が崩れ落ちたり，実験中の教室に雨が降ったりする。つい最近も講義中に天井がかなりの範囲落下したそうだ。そのたびに施設課の，お医者さんが，膏薬を貼って手当をしてくれるが，そんなことでなおりゃせん。わしは，ほとほと疲れた。わしが後どのくらいもつかテスト中かも知れん。でも聞くところによると，わしの2世が35年に誕生して，年々成長しているようだ。お役目も，もう少しだ。最後の力をふりしぼって頑張るか。

## 3．〝倒　壊　寸　前〟

北海道大学体育館

日露戦争時代教練場として建てられた北大体育館は，土台が腐朽し，床はでこぼこで波をうち，少し強い運動にもすぐ床板が踏み抜かれ，修理でつぎはぎだらけ。それに，はりや，館全体が老朽弱体でガタガタ。正課体育で一斉に跳躍運動でもしようものなら，ちょうど地震と同じ現象を呈する危険極まりないものである。

雨降り，荒天，冬期間こそ体育館が必要であるというのに，雨が降ると雨漏りで床は洪水となって滑るし，雪が降り続くといつ潰れるかとオチオチ，スポーツなどはできない。そのうえ使用者が昔の500人から5000人に激増し，利用者が10倍に増した今も，なお依然として「とぼそ落ち，いらか破れた猫の額ほどの体育館」で，屋根の穴から月を仰ぎ，洪水の中で薄氷を踏む思いをしている現状である。

大望を抱き，たくましい健康な学生を鍛えるにふさわしい体育館に早くたてかえてほしい。

## 4．〝不足施設の窮状を嘆く〟

北海道学芸大学岩見沢分校

旧青年師範学校からひきついだ，昭和15年建設の木造バラック建796坪は，定員567名の学生，54名の教官，42名の事務系職員を収容するにはあまりにも狭い。

地元民も「これが国立大学か」と驚いて，28年から3か年に教室など265坪を建設寄付し，昭和30年には国費で自然科学実験室238坪を新営，また教職員・同窓生のきょ金で100坪の図書館が建設寄付されたが，いまだ計画坪数の47%という少なさで，研究室・講義室を学生寄宿舎や各所に分散して，やっとやりくりしている。

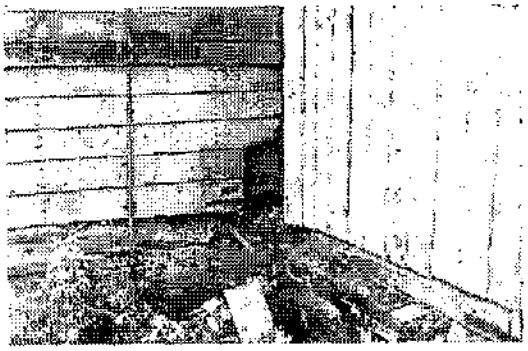
なかでも特にひどいのは自然科学関係で，専攻学生105名に対して実験室は，物理・化学・生物・地学ともそれぞれ18坪のが1室で，廊下も仕切って実験室・標本室に使っている。満足な実験などとても望めない。教官の研究室も，物理などは教官3名に9坪の研究室。まともな研究はおろか，初歩的な実験すら無理というものである。

廊下の間仕切りで化学演習室

## 5. 〝家鳴りする分室の老朽校舎〟

北海道学芸大学旭川分校

本分校は，本校舎と，2キロメートル離れたところにある旧軍兵舎（経過年数58年）を利用した分室校舎と2か所に分散授業している。そのため，厳寒期の通学，授業時間の短縮，休憩30分延長などいくたの困難があり，地元民の協力，国費による校舎建設などによって本校舎への統合整備計画を進めているが，まだ1,508坪の老朽校舎を使用している。この荒廃した分室校舎はうす暗く陰惨な感じで，大学の教育・研究の場としては似ても似つかぬ建物である。また近年，土台柱などの腐朽がはなはだしくなったため，雪害で125坪も倒壊しており，本年の融雪期には屋根より落下の多量の雪の大振動で，2階建が地震のごとくグラグラと家鳴りし，あわや倒壊かと学生を驚かせたこともある。来春の融雪時を思い慄然となるものがある。



土台廻りの腐朽

## 6. 〝これでも大学病院か〟

弘前大学医学部附属病院

これが大学病院か，と外来者が異口同音に言う。昭和2年に弘前市立病院として建てられた木造の建物で，狭くて高低の多い土地に建て増ししたものである。建物間隔も充分でなく，積雪による被害も大きい。その上床板はでこぼこである。

各科の診療室もとびとびにあるため，案内図を見たくらいでのみこめない複雑さだ。

手術室，中央レントゲンでは廊下をつぶして診療している有様で，あたかも鰻の寝床のようだ。病室がまたひどい。

この雑然とした木造建物が火事になったら一瞬にして燃えてしまうだろう。

それに市街の中心で高台地の風上の位置であるため市民の恐怖のまとにもなっている。

廊下が手術室の一部に使用されている

## 7．〝ボロ建物で教官室もない農芸化学〟

岩　手　大　学　農　学　部

日本で最初の高等農林学校。農学博士第一号の玉利喜造先生を初代校長に迎えて明治35年に発足した現在の岩手大学農学部農芸化学科は，創立当時農学科第2部として木造平家建222坪で充分であったが，その後学生の定員増と講堂の増加のため，大正8年増築，昭和25年総合農学科新設と共に講義室，実験室等を共用し，現在では専用施設は428坪である。

しかしこれとても建築後42年を経過し，近代の化学実験のためには最も不適当な古代の木造で，機能上の障害が著しい危険建物である。なお基準による必要坪数720坪に対し292坪の不足で，教授室もなく，学生実験室と同居し，また酵素化学膠質学及びエーテル室等の実験室がないので，ガス，電熱等による化学実験は狭あいと火災予防の危険にさらされている。特にエーテル室がないため，ガスを使用する実験室において間に合せているので，万一の場合爆発の危険がある。教官一同戦々きょうきょうとして，実験を続けている。

## 8．〝地震がきたらさあ大変〟

東北大学抗酸菌病研究所

昭和18年，戦時中資材が最も欠乏しているとき建てられた無筋コンクリート3階建（3階は屋根裏，ほんとうは中2階）。これが当研究所の本館である。この建物は戦後，内外壁に亀裂が生じ，年々それが甚しくなるばかりなので，昭和33年，東北建築技術振興会に耐力調査を依頼したところ，耐震0.3というご託宣（関東大地震0.3）。強震の際は瞬時に壊滅してしまう恐ろしさ。これが結核と癩の研究で内外の学界に成果を示した本研究所の施設とは，全くお寒い限りである。

この不安と恐怖から解放され，設備が整った研究室ができたらと，研究員たちは切実にねがっている。

## 9. 〝すしづめ研究室にあえぐ〟

東北大学電気通信研究所

通信工学や電子工学，およびそれらの基礎となる物性の研究を担当する本研究所は，誕生以来26年になり，11部門と教職員及び研究員を合せ約200人の大世帯に充実し，すぐれた研究成果をあげている。

しかし，その研究施設はＲＣ１棟の半分275坪（残り半分は工学部精密工学科）をまとまって占有するにすぎず，他の460坪程は電気工学科等の研究施設を間借りし，ギリギリのすし詰め研究室である。それも学科では機構拡充，学生増募で返済を要求され腹背両面より苦しい立場においこまれ，研究に実験に大きな壁に突き当っている。今年500余坪建築が決定したが，まだ1,300坪程足りない。

## 10. 〝老朽で狭苦しい〟

東北大学医学部附属病院

受付や外来，薬局等のある表玄関をはじめ，主な建物は明治45年建築で，戦災復旧して近代建築がようやく立ち並ぶ当市では，ゴシック風に突っ立ったスレート葺の屋根の建築様式などは，むしろ奇異にすら感じられる。

それだけならよいが，内は晴天でも薄暗く狭くるしい。手術室は窓枠が腐れ，雨が吹き込み，病室は風通しが悪く，かびくさい。また柱が傾き床がビシビシする薬局等数えたらきりがない。期待と希望をもって遠くからやってくる患者さんたちは長い曲りくねった廊下を歩き，外来待合室で肩と肩をすり合わせて待っているし，医師も看護婦も遠く走り廻わらなければならないのが当病院の現状である。

## 11. 〝ゆるみ・振動・騒音の学舎〟

山形大学教育学部体育・美術・音楽科教室

教育学部施設については、全国ほとんど同じケースで県立師範学校の昇格で教員養成の責任を負わされているが，当学の教育学部諸施設は，本館と称する管理室・講義室のある建物を除いて，ほとんど撤去古材としては，薪に等しいほどに老朽化している。とくに、体育教室（$W_2$ 124坪大正11年）は控え柱にものものしく身を固め，図工教室（$W_1$ 99坪明治34年）は，自動車の回転ごとにバイブレーターとなり建具硝子の哀れな音楽を奏でる。また茶色化したソフトテックスおが屑充填の壁より暗音の漏れる音楽教室（$W_1$ 48坪明治33年）は、隣接する民家からの苦情の処置に困りはてている。

## 12. 〝とびとびの仮住まい〟

宇都宮大学農学部林学科

本学の林学科は，高等農林学校創立以来40年に近い伝統をもっている。いま林学科には親が同窓先輩である者が６人，兄が卒業生である者が４名もいる。

こんなに伝統があるのに，昭和24年の火災以来，林学の研究室は幾度も移転して，いつも仮住居である。父の頃よりみすぼらしいと話題になっている。

５講座の研究室が４か所に分散している。雨や雪の日などは，研究室に行くのもついおっくうになってしまう。

昔の家主みたいな林学科が，いまでは間借り住いだ。いつになったらせめて人並みの研究室になるのだろう。

## 13. 〝よくぞ住んでいる〟

宇都宮大学姿川寮

ここの建物は戦時中，軍需工場の工員寮として建てられた腐朽甚しい木造バラック寮舎である。雨降れば，破れ窓より吹き込み室内を濡らす。まして悲惨は台風時。風雨にたたかれる建物は大きく揺れて，崩壊寸前を思わせ，きしむ音は全く不気味。

継ぎ柱，波うち穴のあいた廊下、押入れのない居室。水道の設備もなく，屋外の井戸ポンプ3本。120名の寮生が住む施設としては全く最低、およそ現代の文化に取り残された遺物である。

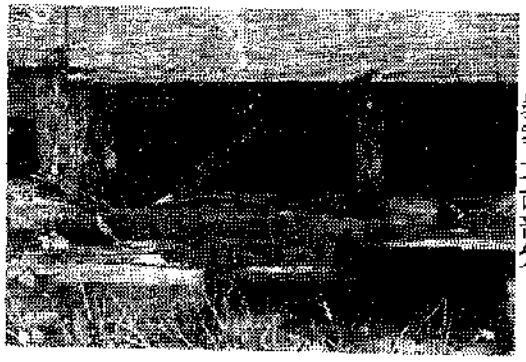
毎年4月の新入生入寮時は，つきそいの父兄が余りの悪さに目をうるませる始末で，ひとたび火災発生となれば，消火栓，貯水槽なく，枯れきった建物が燃え落ちるにさして時間はかからない。まことにぶっそうな建物である。

## 14. 〝唯一の園芸学部ではあるけれど〟

千葉大学園芸学部

特色があるということは，多くの場合強味ではあるが，その反面，それ故の悩みも亦少なくない。本学部が国立大学唯一の園芸学部であるため，ここを訪れる内外人は年間5万人にもたっし，特に外国の学者や専門家の来訪の多い昨今、明治35年建築木造平家建の実験室，研究室は、老朽の程度が著しく，我が国唯一と誇るには余りにも貧弱である。

日本庭園の神秘的な美しさを研究したいと望む外人がやって来て，建物の悪いのに驚くのは毎度のことながら，デリー市の公園部長が造園研究室の床を踏み抜いたときや，コロンボプランの研修生が廊下を歩いて，左右の研究室に地震が起ったときなど，いつも肩身の狭い想いをしている現状である。



教室土台部分

## 15. 〝狭くて身うごきできない〟

東京大学地震研究所

地震研究所本館及び2号館で働らいている職員数は現在約100名で，創設当時にくらべ5倍に膨張し，部門数も現在は14部門となっている。

然るに建物の方は一向拡張されず，戦後資材欠乏の際造った，老朽危険に瀕している2号館を加えても，1部門当り37坪に過ぎない。この中に事務室，廊下，便所等も含まれている。文部省で定めた最低基準坪数でも，研究に使用できる実験部一部門当り150坪とされているのに，その1/5にすぎないのだから，現在がいかに狭あいであるかは容易に想像できよう。12坪の一室に教授1，助教授1，助手3，雇員2が入っている。このためお互いに仕事について干渉し合い，落着いた研究などとうていできない。また，図書，資料，標本等の置き場に困り，廊下一杯に並べているので狭くなり，平素でも通行に支障するほどで，災害時のことを考えれば慄然たるものがある。保管上もまた不備をまぬかれない。

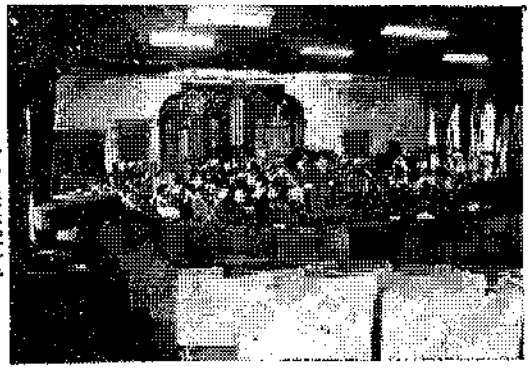
外国の学者からも，これが世界をリードする日本地震学のもとじめかと驚かれているのが現状である。

## 16. 〝命脈つきた奏楽室〟

東京芸術大学音楽学部

明治23年創建，日本最古の洋式奏楽堂として文明開化に大きな役割をはたした旧音楽学校の建物も長年の酷使と教育内容の発展変革には抗すべくもなく，経過年齢71歳，人間だったらとうの昔にご引退願っているものである。

創建当時は教官，学生合せて60名，457坪。そのうちの130坪がこの奏楽堂である。現在，教官，学生合せて約1,200名，四管編成の大オーケストラ（楽員100名），200余名のコーラス，天井までふるわすブラスバンド等々が入れ替り立ち替りフル運転で練習している。



満員の奏楽堂

## 17. 〝台風18号と寄宿舎〟

東京教育大学国府台分校

新聞，ラジオ，テレビは刻々と台風襲来の模様とその強力な破壊力を伝えてくる。

〝18号は室戸岬を経て夕方には関東方面に到来する予定。この台風は……〟

授業打ち切りで帰って来た寄宿舎の生徒を集めて舎監の先生は，〝皆さん，台風が来ます。布団，大切なもの，学用品を持って新しくできた教室に引越しましょう〟とくりかえされる。耳の聞えない生徒たちは，異常な空気におびえている。無理もない。この寄宿舎は明治時代の遺物なのである。垂直に立つことすらあぶなくなったこの建物に寝起きするろう児たちはこれからも台風のたびに，地震のたびに，身の安全をおびやかされつづけるのであろう。

## 18. 〝梅雨期，家ダニのでる校舎〟

東京教育大学附属駒場高等学校

本校は，明治23年に建てた兵舎を校舎に転用しているために，いろいろ校舎としては困る問題がある。

兵舎として何十年もの歴史を経ているために，床板は磨滅し，天井裏にはこりや塵が堆積しているものと見えて，梅雨期になると教官室や教室にダニが落ちてきて閉口する。また，床下の通気口から犬が入ってお産し野良犬が殖えて困るが，それにもまして困ることは，老犬が床の下で病んだ場合である。取り除くために保健所へ頼めば，清掃部だと言うし，清掃係へ頼めば保健所だと言うし，死後日数は益々経過して臭気は老朽校舎に満ち全く手におえなくなる。屋根瓦が土をのせてある昔の式で，針金で止めてないので，生徒の活動で校舎が振動し，そのため瓦がずれ落ちて雨や雪の時には窓下に接近できない。補修の経費も並々ではない。

## 19. 〝参観者ビックリ

東京教育大学雑司ヶ谷分校盲学校寄宿舎

全国唯一の国立盲学校，メッカといわれ歴史は永く70年。歴史も古いが施設も古い。昭和29年に不慮の火災にあい，復旧工事の男子寮は鉄筋造の三階建，これも第二期工事で中止。これと好対照の女子寮・炊事場等。

女子寮は薄暗くて，狭苦しい，廊下は凹凸，足をすべらせけがをするようなこともある。畳はブカブカ，窓はこわれ，硝子を入れようもない始末，戸締は不完全で痴漢が侵入したことさえある。1部屋16畳に6～7名の盲女子を収容，さらに不足し土間を改造して住まわせている。食堂炊事場も廃墟のようで，暗くて，狭くて，薄汚ない。戦争中の改造のせいか，何度やっても基礎が沈み，柱は喰違って，根太は曲がり，床はブカブカ，ヌルヌルすべる。集団下痢の発生も偶然ではないよう。消防署は危険建物と指定し，消防訓練のよき演習場としている。

## 20. 〝すぐにもこわれる〟

東京工業大学寄宿舎

薄暗い廊下は傾斜して波打っている。歩いていても妙な錯覚をおこす。土台柱の根もとは腐蝕し，窓わくは傾き，局部的補修は不可能である。すき間風は吹き通し，夏はともかく，冬は寒風の中にさらされている。〝寮が倒れない限り他のどんな建物も倒れない〟といった言葉がささやかれている。この建物は大正12年の関東震災の後のバラックとして大正13年に建てられ，昭和5年に現位置に移築したもので，風雪30余年，木造建物の耐用年数からいってもすでに一生を終った建物で，関東震災の応急仮建物とはこんなものであったかと知るには好個のものであるが情ないことである。

窓わくは傾く

この間多数の人材を送り迎えしたとはいえこんな状態でよいであろうか。国有財産監守者，防火管理者たるもの、毎日毎日が心配の種である。

## 21. 〝この現況〟

お茶の水女子大学文教育学部附属中学校

本校校舎は年数からいえば，それ程でないのに，常識では考えられない老朽ぶりで，授業や生徒の管理に頭をなやましている。

1，階段や床板が歩くたびにきしんで，授業中は一つおいて隣の教室まできこえ，ほとんど机間巡視ができない。

2，天井が弛み生徒が弁当をたべるときに上から塵が落ち蓋をあけたままではたべられない。

3，毎年秋口になると，どこからともなく家ダニが発生し，金をかけて消毒をしている。

4，床板がやぶれ，時々生徒が足をつっこんでけがをする。この穴に上から板をはるので教室では机が整頓できない。

5，廊下が40糎ばかり下がり，応急修理をしたが，非常の場合（最近のように地震が度々あるとき）はどうするかが心配の種である。

6，窓枠が老朽で開閉がスムースにいかないので，硝子が落ちるのはたびたびで，窓枠全部が庭掃除の生徒のそばに落ちたことがあってぞっとさせられた。

## 22. 〝旧兵器庫までも研究室に〟

横浜国立大学工学部電気工学科

電気工学科は昭和20年終戦の年に，工業専門学校の通信工学科として応急に設置された。従って施設は皆無に近い状態で発足し，44坪の木造兵器庫を利用して実験室にし，廃止された航空学科の風洞実験室は天井が高いので，これを高電圧実験室にあてた。大学になっても，昭和25年110坪の木造強弱電実験室をとりあえず一棟新築したのみである。この学科の専用建物は，現在計6棟481坪あるが，鉄筋造は変電室の一部を利用した107坪のみである。

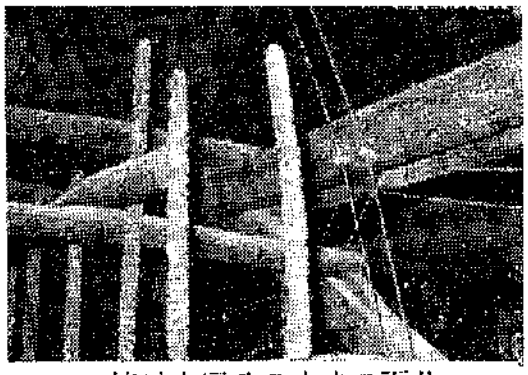
40～50坪の古い（経過年数20年以上）木造建物が各所に分散していて，火災予防上も危険この上なく，横浜市消防局からは勧告をうけている状態である。これが現代受験生の最もあこがれる学科かと驚くばかりだ。学生数は昭和31年の28名定員から，現在は60名，更に来年度は8学科目，入学定員80名に成長しようとしている。この学科にも，世間並の教育施設を贈りたいものだ。

## 23. 〝大学の老廃施設〟

新潟大学医学部附属病院・同教育学部

ある学部の学生が小学校から大学へ進学するにつれて施設が貧困になるとぼやいたとか。本学の施設は47,000坪。そのうち明治時代が19%，大正が24%で半分老朽木造。しかも多湿多雪の海風を受ける当地の木材鉄材および塗装の老化はめだって早い。病院は狭い敷地に間隔を狭めて建ち，その間に更に小建物がせり合っているので，火災でもあったらひとたまりもない。診療，研究の部門は危険にさらされながらその中に散在している。焼けたままの小屋を天井で隠している炊事場はちとひどすぎる。

教育学部は53%が明治で，危うく補強柱と筋違でもっているが，根本治療は新築同様の金がかかるので，本建築を待つことになっている。これと同様にひどいのは寄宿舎の1,600坪で壁の木舞がみえて鼠がのぞく態は映画の貧乏長屋そのままである。いずれもこれ等の建物は暗く不便で，湿度と腐蝕を好む虫がはって非衛生極りない。まったく時代逆行というか忘れられた文教施設である。



焼け小屋そのままの天井

教育学部研究室の補強柱

## 24. 〝寺の庫裡(くり)とまちがう〟

金沢大学女子寮

明治22年石川師範学校寄宿舎として建てられたもの。付属小，中学校構内の運動場予定地にいまだに残っている。中に一歩足を踏み入れると，うす暗く，古色そうぜんとして，しめっぽい。梁，天井，柱，床板にいたるまで黒光りしている。寺の庫裡とまちがう建物。さすがに女子の寄宿舎らしく，よく掃除がゆきとどいているが，寄る年波はいかんともしがたく，土台，柱の腐りが進み余命いくばくもない。入寮希望生も余りのひどさに，ちゅうちょする始末。耐力度3,300点。別の土地に明るい寄宿舎を建て，こんなひどい建物とは一刻も早く別れるべきだ。

## 25. ≒明治がここにある≒

金沢大学医学部附属病院

明治は遠くなりにけりというけれど，今なお明治がここにあるのが大学病院である。

明治38年に建てられ，今日まで57年。その間，次々と増築され，密集していわゆる≒たこの足建築≒と相成った。火災にでもあったら，ひとたまりもない。土台は腐り，床は波うち，建物は傾き，近代医学の粋を容れるには，余りにも老朽でありすぎる。外科の患者が松葉杖で廊下を歩いたら，杖が腐った穴にはまって，又別の足が悪くなったとか。落語の種になりそうな話である。

現有坪数12,300坪，うち老朽7,000坪，(病棟1,280坪，臨床研究室1,660坪，調理室450坪，付属学校および寄宿舎980坪，外来棟1,580坪，その他)

≒明治は早く遠くにしたいもの≒

## 26. ≒エンジニヤーの卵も難産≒

金沢大学工学部

廊下を歩けば床が振動する，窓を締めてもすきま風が入る，雪が降ればすが漏りする。これでは精密を要する実験も製図もできる訳がない。老朽で地震に弱い，密集して火災の危険にさらされた建物のなかに，貴重な器材あり，書籍あり，研究データあり。近代科学の教授と研究の場としては，およそひどい老朽の建物。毎年エンジニヤーの卵を難産して世に送り出している。

工学部の大部分が，大正10年創設の頃そのままのもので，約40年を経過し，雪害，蟻害も手伝って，老朽の進行が意外に早い。現有6,590坪のうち，老朽5,400坪（機械工学1,400坪，電気工学900坪，土木工学500坪，化学機械640坪，その他）

## 27. 〝信州名物は「そば」だけでない〟

信州大学繊維学部紡織工学科

よたよたの建物，紡織工場の震動が正門を入るとすぐにききとれる。微小建物がいたるところに無計画に建てられている。これがみな明治43年（経過年数52年）だから驚く。

製糸研究室，絹糸物理研究室と名前だけは立派だが，せまいうす暗い部屋に教官が一人，何もすることのできない程のせまさだ。かたむいた渡廊下がいたずらに目につく。これも雪国の特徴。主たる工場が約950坪，ところが工場は整備計画の基準外である。紡織工学科から工場を除いたら何ができるだろうか。

研究室等17棟538坪。1棟平均32坪。とにかく，これらの建物をいかに活用し，運営をはかるか。これが大学に課せられた使命とするならば何とあわれなことではないか。信州に名物がまた一つふえた。

## 28. 〝老朽校舎をなくそう〟

静　岡　大　学　工　学　部

工学部正門をくぐって先ず目につくのは昨年新営された鉄筋造の化学系本館である。構内を歩くことしばし，これとは全く対照的な古いおそまつな，一見して旧軍施設とわかる校舎がみえてくる。この校舎は明治43年建で経過年数52年というもので，構内建物36棟のうち何と15棟（約1,900坪）もある。

この中で機械工学科の建物はほとんど明治43年建，木造校舎が5棟（約800坪）もある。羽目板，窓ガラスは破れ放題のまま，そのうえ旧軍施設の規格どおり窓は少く，薄暗い実験室は機械器具で足の踏み場もない。老朽な上に狭隘なのである。この間も機械にはさまれ三指を切った職員もいる。また火事にでもなったらと鉄筋校舎を眺めながら防災観念は片時も離れない。

これが伝統を誇る工学部の現状である。

## 29. 〝風におののき，地震におびえる〟

名古屋大学教育学部付属高等学校

明治32年に建てたときく老朽校舎。もと愛知師範付小が使いふるした旧校舎を名古屋市から借りて一時住まいをしている。

一昨年の伊勢湾台風で手痛い損害をうけた。以来，天井は曲り波うっているが，かんたんになおしようがないらしい。今春には合併教室の床の片隅がにわかに落ちて，「立入禁止」の張り縄を，教室のなかにめぐらしたこともある。私たちには風と地震がなにより心配である。「風と地震にはまっ先に退避しなさい。平素廊下はソッと歩くことにしよう。」と生徒に申し渡している。老朽をこえた危険な校舎となっている。

今にも倒れる

もう一つ困ったことには，この校舎の立退き返還を名古屋市から，要求されている。

## 30. 〝一学科に三学科〟

京都大学工学部

電気工学の進歩はめざましく，文明史上にあたらしい時期をつくり，人類の幸福に貢献するところがたいへん大きい。工学部では電気，電子工学科のほかに電気工学の各分野を系統的，綜合的に把握する綜合技術者育成の要望にこたえて，あらたに電気工学第二学科の新設を見たのであるが，見られないのは施設である。

建造以来60年以上の年月を経た電気工学科の一教室に，電子，電気第二の二学科を収容している。すし詰め教室は中学校ばかりでなく大学にもあるわけである。

廊下も部屋のうち

さらに，機械工学科の機械工場は，明治30年代のもので，窓は小さく昼なお暗く，出入口をさがすのもなかなかむずかしい。学生を教育する場としてはまことにお粗末である。

鉱山・冶金の二学科も雑居のありさまで，一日も早く整備されることが強く望まれている。

## 31. 〝毎日はらはら，もうこれ以上はあぶない〟

京都学芸大学学芸学部付属桃山中学校

現在の校舎は，明治42年に，京都府立女子師範学校として建設以来52年，大正6年現在地に移転改築されてから44年という老朽建物である。建物坪数1,138坪の内大半の831坪が耐力度4,000点台で，最低は2,693点というひどさである。本館，教室は薄暗く，かたむいた建物で，将来の日本をになう伸びざかりの生徒を，常時，風雨・地震等にびくびくしながら教育している。これが世間から憧憬の的になっている当大学付属桃山中学校の現状である。幸い長年月の間支障なく過してはきたが，もうこれ以上は，教育上及び建物維持管理上あぶなく，一日も放置できない。

くさった土台

## 32. 〝今様うぐいす張りの学生寄宿舎〟

奈　良　女　子　大　学

明治43年の建設で凡そ50年を経過した木造平家建瓦葺6棟総延坪1,520坪，耐力度点数3,000点未満。床下根太は腐朽し，廊下といわず部屋といわずいたる所うぐいす張りならぬ音がするばかりか，高低が甚だしく波打っている。また，床が低いため湿気も多く，畳の腐蝕も甚だしいが，これだけ全身衰弱では手の施しようもなく，ひたすら新営されるのを待つばかりである。

この建物でよく住めたものだと来訪者は妙な感心をされる。

本学は女子の国立大学として全国から志願者が集まっているので，在学生のうち自宅通学可能の者はわずかに25%に過ぎない。

女子は男子のようにどこにでも下宿することは許されないので，入寮希望者は定員を遙かに超過し，現在はその⅔の404人しか収容できない。このような老朽危険建物にも甘んじて入居しているゆえんである。

幸い昭和34年度より毎年国立文教施設整備費で最も近代的な鉄筋コンクリート造りに改築が認められ，昭和36年度までに全体計画の半分が完成する運びとなったが，これでも学生160人を収容できるのみで，他の240人は旧寮に残されている。

新寮と旧寮の不公平はさることながら，一刻も早く危険建物より解放されることを念願してやまない。

## 33. 〝映画化された校舎〟

岡山大学理学部

というと聞えはよいが，実は昭和33年春「アチャコ，伴淳の二等兵物語」に出てくる兵営にうってつけの建物として農学部，事務局やその周辺部が撮影されたというわけである。だがよく考えてみると，教育研究の場であるべき最高学府の施設が，つわもの共が夢の跡となった遠い過去の兵営に未だにうってつけであるとは何と困ったことではないか。

理学部の数学や物理の建物群が直接撮影されたわけではないが，同じ津島地区にあって同じく兵営出身である。建物の誕生も同じく明治44年であるから今年を以て満50年となった。人間も50年経つと外見丈夫そうに見えても人知れぬ故障に悩むものであるらしいが建物も同じことだ。体質改造と同じく建物改造も大いにやり，大学独特の雰囲気をかもし出すようにしたいものだ。

## 34. 〝真ん中に柱の建つている教室〟

岡山大学教育学部付属小学校

長い夏休みも終った9月初めの付属小学校，教室の中で小学生がワイワイ騒いでいる。

2階の生徒「これで床もゆれんようになったなあ。夏休みまでは皆が一斉に立上ると床がゆれて抜け落ちりゃせんかとこわかった。」

1階の生徒「教室のどまん中に柱が建ってなんか眼ざわりじゃなあ。2階は喜んどるぞ。早うコンクリートで建てりゃええのに。」

1階の他教室の生徒「お前とこは柱が1本か，俺とこは柱が2本も建っとるぞ。じゃまんなっておえん。ぼっけえことをするもんじゃ。」ワイワイワイ。

戦災で焼失して昭和23年寄附金で復旧したというこの建物はまだ13年にしかならないが，小材を組合わせた2階床のトラス梁は，調べてみるとボルトはゆるみ，無い部分もあり，梁中央で7糎も撓んでいた。改築費が来るまでの応急処置として1階に鉄柱を建ててもたせている。

## 35. 〝真壁造りの研究所〟

岡山大学農業生物研究所

略して「農研」というこの研究所は，昭和26年大原氏より寄贈を受けたもので，今でも「大原農業研究所」と呼ぶ人も多い。名称の義理立ては寄贈者に敬意を表するものとしていいことだとしても，建物まで未だに義理立てして大正3年建設（48年経過）当時のままの赤土の真壁造りを継承して「危ないなあ，」とか「振動で使いものにならん。」とか言いながら使用せざるを得ないのは，何としても困ったことだ。昭和35年度に微細気象部が新設されて現在6部門であるが，基準坪数に比し充足率74%とますます狭く，建物は傾き，床はガタガタ，真壁はボロボロ，新任の先生は入るに家なく，あっちへウロウロ，こっちへウロウロ。早く既設の鉄筋コンクリート造りを増築（あと502坪）して老朽と不足を解消すると同時に，国立大学の研究所としての風格を具えたいものだ。

## 36. 〝間借り住まいの〟

広島大学教育学部附属三原中学校

三原中学校は6クラス，生徒数300名である。現有施設は157坪で，基準800坪に対し643坪も不足している。

しかも現有の157坪は木造建物で，大正元年に建築され50年を経過した危険校舎である。不足分の教室は，同一敷地内の三原分校の建物を借用しているが，同分校は明治43年に建築されたもので，中学校以上の老朽で，しかも大学生の使用する建物であるため，中学校としては使用上多大の不便を感じている。一日も早く危険校舎より解放され，明るい新校舎で授業のできることを念願するものである。

## 37. 〝すし詰め実験室〟

広島大学理学部化学科

理学部本館は，戦災のため，建物内部は骨組を残し焼失したので，昭和23年より補修を始め，現在外部を残し一応完了した。

同学部は従来より狭あいであったが，科学技術振興に伴い，学生増並びに講座増等があり一層施設に不足し，基準4,016坪に対し現有2,860坪で 1,200 坪も不足している。

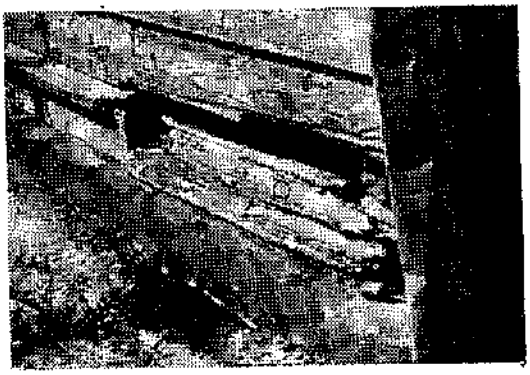
特に化学科は基準1,200坪に対し現有600坪で，丁度半分の施設で実験研究を実施している状態で，そのため実験室を廊下まで延長する現況である。まさにすし詰め実験室である。

## 38. 〝乱立した若朽建物〟

徳島大学工学部

工学部は戦災により建物の大部分を焼失し，戦後の最も粗悪な資材で建てられた老朽度の甚だしい危険建物である。特に土木工学部の木造建物は，その代表的なもの。内部設備に適合しない応急的なもので，しばしば教育研究に支障があり，毎年の台風の被害は多く，中でも土木セメント教室の如きは，土台，柱，等がほとんど朽廃しているため倒壊の危険にさらされている。雨漏りのため天井壁はしばしば落下し，内部器具，機械設備の損傷はもちろんである。

建物の配置は4棟に乱立し，渡り廊下もなく，これが科学技術者を養成する最高機関かと驚く。現有総坪数3,890坪のうち，土木工学科は620坪であり，現在大いに科学振興が叫ばれている折から大学の教育研究施設としては甚だ貧弱である。



土木セメント教室の土台

## 39. 〝床板に足を踏みこむ〟

福岡学芸大学学芸学部付属福岡中学校

付中では国費と父兄の寄付でまとまった校舎ができていたが，昭和35年1月の火災で校舎を失い，大学校舎，付小校舎等を間借りして急場をしのいでいる。

間借り先の校舎は明治32年（62年経過）に建てられたものが主で，南側廊下間取の教室であるため冬期は日中でも電灯が必要である。そのうえに少しの雨でもすぐに漏る老朽建物であり，青年期に入る中学生を収容するには危険極まりない。

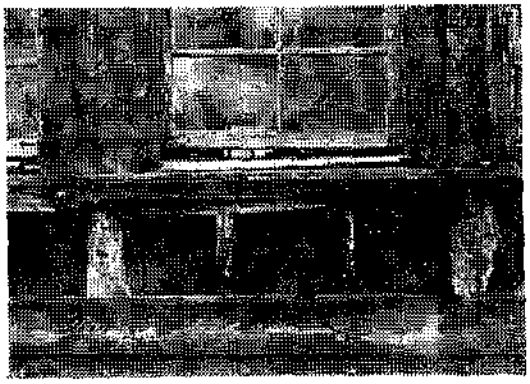
床板に足を踏みこむ生徒もおり，分散した教室に出入りするため中学生が足もとをたしかめながら廊下を歩くという風景はまったく痛ましい。

## 40. 〝強風にあぶない〟

福岡学芸大学学芸学部付属久留米小学校

ここの建物は明治41年（53年経過）に軍兵舎として建てられたもので，すりへった石畳の土間から薄暗い中に入ると軍当時のままの高い中廊下があり，その両側に教室がある。両側とも採光は考えてなく，床板は凸凹で釘もきかないのか，つぎはぎの板がういており，風の日は床下から埃が舞い上るという。

本館は880坪という2階建の大兵舎であるため，教室以外に児童クラブ室等が多いが，窓の開閉ができない程，柱，窓枠等がくさり，ゆがみ，素人目にもあぶないことがわかる。階上の図画教室が一番ひどく「窓に近寄るな」という張り紙がしてある。



窓に近寄るな

ほかに同時代の平家教室があるが同様なものであり，ともに他の公立中小学校に見られないひどい建物である。

## 41. 〝老朽動脈硬化症〟

九州大学医学部附属病院

その規模においては国立大学附属病院中，最大を誇る由緒ある病院であるが施設の点では困ったものの標本のように言われる。戦前，すでに老朽木造建物の改築が継続事業として進められていた。しかし，それが戦時中ストップされそれ以来改築がはかばかしくなく，老朽に加えて蟻害が甚しいため，放射線科病棟の小屋組の陸梁が折れ大騒ぎとなったこともある。さらに悪いことには，改築して病院機能を能率化する計画のところ，改築がはかばかしくないので、例えば調理所から延々400メートル以上食事を運ばなければならない病棟が過半を占めている。これは一例で病院機能の非能率は著しいものがある。病院当局は何十年たったら老朽施設の不安から脱し，病院機能の能率化が達成せられるものかと首をかしげている。

かたむく病室

## 42. 〝馬小屋にも劣る〟

九州大学工学部高速流実験室

機械学科の高速流研究室は，学界ではその研究業績が高く評価され，関門トンネルの換気実験，その他実社会に貢献するところが大きい。これだけの業績をあげている研究室はどんな施設かというのに，見る人は，惨澹と言ってもよいくらいの余りのお粗末さに必ず驚いてしまう。〝馬小屋にも劣る〟というのは誇張ではなく全くの事実である。煉瓦造以外の研究施設の過半を占める木造約200坪は戦時中に建てられたものであるため，すでに老朽化し，冬は隙間もる風，夏はトタン屋根を通してくる極熱にさらされ，苦闘する研究者は全く同情なしには見られない。

高速流実験室

## 43. 〝ほう！　これはひどい。これに学生が住んでいるのですか！〟

九　州　大　学　寄　宿　舎

「これが，九州大学の寄宿舎です。」と訪問者に説明したとたん「ほう！　これはひどい。これに学生が住んでいるのですか！」と聞きかえされる。それほど，この寄宿舎は老廃している。それもそのはず，50有余年の風雨に耐えてきたこの建物は，根太はゆるみ屋根は波打ち，今朝も寮生一人が廊下の板に足をふみこんでけがをした。こんな寄宿舎が680坪ある。しかしそれでも廃止するわけにもいかない。学生もそれを承知で，ぜひ入れてくれと言ってくるからだ。周囲に立ち並ぶ鉄筋の近代建築の中にとりのこされた，木造平家のこの寄宿舎は，たしかに大学として大きな問題をもっている。

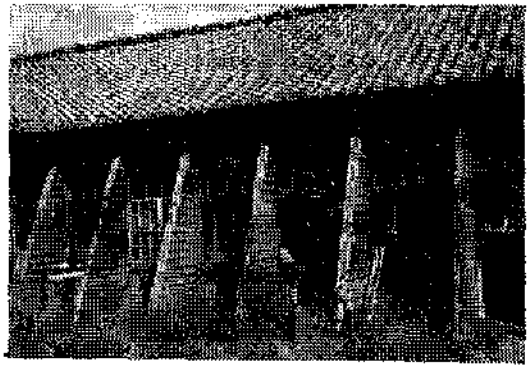
学　生　寄　宿　舎

## 44. 〝台風時には休講も〟

佐　賀　大　学　教　育　学　部

巢隠城趾の片隅に，しょう然と朽ち果てた建物が，教育学部の教室と研究室である。建ったのが明治39年だから齢55。当時共進会建物として君臨したもの、華かな時代もあったわけである。その後師範学校の寄宿舎に転身，大学となって，これをまた教室研究室に模様替したのだから疲れ果てるのも無理はない。少々の補習では支えにもならず使うのにも甚だ勝手が悪い。台風時には一時受講を中止せねば危険である。音楽，家庭科教室はいたみ方が特にひどく，又寮の食堂に至っては柱窓廻りの腐朽が甚だしく建具は動きもしないし建たない。寒風時に寮生が食堂の一部で細々と食を取っているが哀れさよりむしろ不思議に思われる。

かような老朽建物がまだ2,600坪余騒然とたち，大学の建物としては探すのに骨が折れるであろう。県下一のオンボロ学校建物で自慢にならない。早く新営せねばと，ヤキモキしている。



寄宿舎食堂

## 45. ≪手術中、医師の頭に雨がふる≫

熊本大学医学部附属病院

戦災により9,600坪が灰と化した中に，鉄筋の一棟だけが残骸をとどめた。しかも壁体はケロイドの症状で年々剝離し，鉄の窓枠は30年来の風雪に耐え，空襲の洗礼も受け，28年の大水害には水びたしとなり，錆と腐蝕で戸締りもできない。天井内部は蒸気と熱気とでぼろぼろ，漆喰は幾度か脱落しては応急修理を繰返し，水滴は手術中でも医師の頭に落ちる現状を見せつけられては，見る者すべてが≪寿命だなあ≫と思わず溜息をつく。これは30年昔の外来診療所の手術室そのままを使用しているためで，思えば貴い人命を賭ける手術の唯一の場としては余りにもひど過ぎはしないだろうか。

未だに中央診療棟はなく，薬局の180坪は外来診療棟，手術室の150坪は医学部臨床研究棟に，しかも外科は1階東側，耳鼻科は3階西側，婦人科は2階東北隅と各診療科ごとにバラバラの散在振り。実に非能率的である。更に基準坪数1,800坪に対し僅か18%の現状である。

近代医学の進歩は，中央診療部門の形態を必然的に要求しながら，しかも，医学の先進国として自負する我が国立大学病院のこの施設現状たるや実に慨歎にたえない。

手術準備室の一隅

## 46. ≪火事の危険…心配な実験室≫

大分大学学芸学部自然科学実験室

明治41年に建った旧軍隊の施設を臨時的に一部改造した学芸学部は，各所に旧軍隊色がそのままに見られ，53年も経過した建物は危険が日々に増し，つっかい棒をした合併教室等台風の予報を聞くたびにひやひやさせられる。まして実験実習を主体とする自然科学実験室は一時の間に合せで，外壁は勿論のこと，内部の羽目板は破れ，床はかたむき，せまく，これが大学の実験室かと驚く。火事にでもなったらと考えただけでも冷汗三斗というところ。青少年を指導する優秀な教育者を養成する建物としては余りにもひどすぎる建物である。

## 47. 〝あぶない，せまい〟

宮崎大学附属図書館

資材不足の戦争末期に応急建設された木造バラック兵舎を，終戦直後35キロの隔地から移築，附属小学校の仮校舎に使用していた。それを大学設置に伴って学芸学部図書館に模様替したものである。台風被害や白蟻の被害も加わり，老朽というより若朽という方が当っている。学生数2,300，最低600坪も必要なのに僅か183坪の学部図書館に間借りしている形。蔵書は収容しきれず研究室に分散，52坪が学生2,300名の唯一の閲覧室。火災の心配は日日身をせめる。

書架からはみだし廊下に収容した図書

〝せまくてあぶない宮崎大学図書館〟

## 48. 〝台風銀座のまんなかにある〟

鹿児島大学水産学部

鹿児島気象台から，ただいま南島島附近に猛烈な台風が北上しつつあると発表されると，ルース台風の二の舞を演ずるのではないかと不安でたまらない。というのは，この水産学部に木造2階建延730坪(昭和18年建築耐力度3,200点)の老朽建物があって，台風待ちしている顔に見えて仕方がないからだ。

この建物たるや，L型の総2階建瓦葺，県内の幼稚園から小，中，高校どこを探してもこれに似た建物は見当らない。土台はあったらしいが姿は見えない，柱の根元もあったりなかったり。従って窓の高さも区々で硝子障子も動かない。床に至っては沼地の上を歩いているようだ。棟が長いので，北に傾き，南に倒れ，東に倒れ，西に傾き，然もこの建物は桜島，錦江湾の最も眺望絶佳な国定公園観光道路に面して偉観を呈しているので印象的だ，あれで国立大学かと観光客が顔を見合わせるのもやむを得ない。

講義室・実験室・研究室